

後期ライプニッツにおけるモノダの支配-従属関係について

三浦隼暉 (東京大学)

ライプニッツの長い哲学的キャリアのなかで、物体现象に関する立場を、Phemister (2005) に従って三つに分類することができる。第一に、理性的な精神のみが実在し、物体はその表象以外のなにもものでもないという精神的現象主義の立場。第二に、それぞれ独立に存在する複数の実体から構成されるものとして物体を捉えるモノドロジ-的現象主義の立場。第三に、複数の実体がひとつの実体を成し、それを構成要素とは独立に存在する一つの実体と認める物的実体现象主義の立場。この三つである。

ライプニッツ自身は、これらの現象主義の間を揺れ動きつつ自身の哲学を進めていったと考えられる。一般的に、初期から中期のある時期には精神的現象主義として解釈可能なテキストがみられ、中期の『形而上学叙説』においては物的実体现象主義が、そして後期においてはモノドロジ-現象主義がとられたとされる。とりわけ、従来の研究の多くは、ライプニッツが中期から後期へと移るなかで物的実体现象主義を捨てさりモノドロジ-的現象主義をとるようになったことを強調する。それゆえに、後期ライプニッツは、物体の実在性をモノダの表象によって「よく基礎づけられた」ものとしてのみ考えていたと解釈される。

ただし、よく基礎づけられているということは、現象的実在性の強調を意味しない。それはむしろ、ライプニッツ哲学を観念論的立場へと導くものである。山本が述べるように、「物體なるものは、精神乃至一般にモノダの表象を離れては、即ち何らかの主観の意識を離れては、無であり、その全実在性は専ら現象間の規則的連結と相互の一致に存するといふこと、まさにこのことを示すのが「よく基礎づけられた現象」といふ語なのである」[山本 (1953), p. 306]。こうして、モノドロジ-的現象主義は、形而上学的原理への強い依存性によって、物体を単なる観念的な現象へと帰することとなる。

ところで、後期ライプニッツは本当に物体を「よく基礎づけられた」ものとしてしか見ていなかったのであろうか。たとえば、晩年の「デ・ボス宛書簡」に添えられた表では、モノダと並んで、動物や有機的なものが実体のカテゴリーに入れられているし、同書簡に登場する「実体的紐帯」は物的実体を可能にする概念なのである。

もし後期ライプニッツの立場がモノドロジ-的現象主義に止まることなく、さらに実在論的な主張を含む物的実体现象主義にあるとすれば、物体は単に「よく基礎づけられた」現象にとどまるものではない。つまり、物体は、モノダの表象に基礎づけられるという受動的な仕方で実在性を与えられるだけでなく、能動的な仕方でも実在性を要求することとなる。ただし、このことは、物体がそれ自体で実在性の根源となることを意味しているわけではなく、実在性はあくまでモノダに求められなければならない。それでも、モノダは物体の要求なしには物体を基礎づけないのである。その意味で、物体もモノダも、異なる観点から能動的だといえる。

物体による実在性の要求は、自然学的領域に属する有機的身体と、形而上学的領域に属する魂・実体形相・支配的モノダなどとの間に成立している。「物的実体が認められるべき

だと考えられるのは、支配的モノダを伴った有機的身体、すなわち生物ないし動物とか動物に類似したものがそこにあるときだけだからです。それら以外のものは単なる寄せ集めであり、偶有的な一であって、それ自身による一ではありません」(「デ・ボス宛書簡」1713/8/23, GP II, 481-482)。ライプニッツが述べるように、有機的身体にこそ支配的モノダが結びつくのであり、逆に言えば、有機的身体でなければ支配的モノダは結びつかないのである。ここにこそ、有機的身体の実在への要求が存している。

以上のような前提のもと、次のような問いを立てることができる。すなわち、支配的モノダはなぜそのような有機的身体の要求に答えるのか、あるいは逆に、支配的モノダの側から考えるならば、そのような有機的身体の要求を支配的モノダが正当なものとして受け入れそこに結びついていくのはなぜなのか、という問いである。とはいえ、この問いは多少のねじれを含んでいることに注意しなければならない。というのも、支配的モノダが関係するのは従属的モノダであって、有機的身体そのものではないからである。「[身体の] 諸器官に配置された残りの従属的モノダは部分をなすわけではありませんが、それにとっては直接的に必要なものとなっています。そして、それらは第一モノダとともに、動物のような有機的な物的実体へと協働するのです」(「デ・フォルダー宛書簡」1703/6/20, GP II, 252) とライプニッツ自身が述べているように、あくまで支配的モノダ(ここでは「第一モノダ」と結びつくのは、従属的モノダなのである。

それゆえ、有機的身体に対して支配的モノダを直接結びつけるような議論をすることはできない。つまり、「支配的モノダを伴った有機的身体」ということが主張されるとしても、従属的モノダを介しての関係に止まらなければならないのである。それゆえ、有機的身体は、支配的モノダからは独立にその存在様態を明らかにされねばならず、同様に支配的モノダと従属的モノダも、有機的身体からは独立に論じられねばならない。

こうして、本発表の問いは次のように立て直されることとなる。すなわち、支配的モノダと従属的モノダの関係は、どのように有機的身体の存在様態に適合するのか、という問いである。この問いに答えるためには、第一に有機的身体の存在様態を明らかにすること、第二に支配的モノダと従属的モノダの関係を明らかにすること、が必要である。本発表では、とりわけ第二の作業を集中的に行うこととなる。第一の作業は、本発表では扱うことができないが、機会を改めて発表することになるであろう。いずれにせよ、支配的モノダと従属的モノダの関係を明らかにすることは、有機的な物体がそれ自体である種の能動性をもって自らの実在に与していることを明らかにするうえで、重要な一歩となるはずである。

参考文献

Leibniz, G. W., *Die philosophischen Schriften von G. W. Leibniz*, hrsg. von C. I. Gerhardt, Weidman, 1875-1890 (Nachdr., Olms, 1978). (GP)

Phimister, P. (2005), *Leibniz and The Natural World: Activity, Passivity and Corporeal Substances in Leibniz's Philosophy*, Springer.

山本信 (1953) 『ライプニッツ哲学研究』東京大学出版会。